

赤十字NEWS

November2011 Vol.858
http://www.jrc.or.jp



編集・発行 / 日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



「こんなに大きくなったよ!」 日赤は被災地の子どもたちを 応援しています

8月末に仮設校舎が完成した宮城県石巻市立渡波小学校。保健室には、日本赤十字社寄贈によるピカピカのベッドや体重計が入りました。10月7日は1年生の身体測定。どのくらい背が伸びたかな? みんなちょっと緊張気味です。震災の深い傷痕はまだ癒えませんが、子どもたちは日々、大きく、たくましく成長しています。この子どもたちの笑顔と健康を守っていくため、日赤はこれからも支援を続けていきます。
※保健室へのベッドなどの寄贈は、世界の赤十字社から寄せられた「海外救援金」を財源に、岩手・宮城県内の被災小中学校と高等学校を対象に行われました。

CONTENTS

TOPICS 2

東日本大震災
被災者支援の
Love Cross Bus 運行中!

東日本大震災
「こころのケア」で
コミュニティー作りを応援

TOPICS 3

東日本大震災
クウェート政府が原油寄贈
先駆者たち~The History~
Vol.3 橋本綱常

理事会審議報告
常任理事会開催報告

SPECIAL 4 5

東日本大震災
被災地からの「ありがとう」
ただいま支援継続中

AREA NEWS 6 7

徳島・山形・広島・青森
千葉・福井・沖縄・東京

書籍紹介
2012年版赤十字カレンダーご案内
Voice & プレゼント

WORLD 8

中国大地震から3年半
日本からの支援に
たくさんの「謝謝」

紛争下の医療を
武力攻撃から守れ
ICRCがキャンペーン

クロスアップひと

赤十字思想が支えた「石巻赤十字病院の100日間」



ジャーナリスト
由井りょう子さん

東日本大震災で「野戦病院」と化した石巻赤十字病院。救護に携わった医師や看護師、スタッフなどの証言を基にしたドキュメント『石巻赤十字病院の100日間』(小学館)をこのほどまとめあげました。

インタビューした関係者は50人以上。「皆さん十分にやったはずなのに、助けられなかった、あれで良かったのか、という思いを抱えていました。取材は沈着冷静でなければならないのですが、話を聞きながら思わず涙が

出てきました」と振り返ります。

自らも被災し、家族を失った人も。そうした悲しみを抱えながら続けられた救護活動に、赤十字思想の存在を感じたといいます。

本の中には病院事務の派遣スタッフも登場します。医師の一人が「この人たちも一緒に苦労したから」と連れてきたそうです。「普通なら「派遣だから……」と無視する組織もあるのにその逆。赤十字病院で働く皆さんの信頼関係、温かさを感じました」

PROFILE

1947年12月、長野県生まれ。大学在学中から女性誌などで記者として活躍。現在は、医療や介護関係を中心にしたノンフィクションを手がけています。

著書に「黄色い虫 船山馨と妻・春子の生涯」(小学館)、「戦火とドーナツと愛」(集英社)、「ちぎれ雲 いつか老人介護」(河出書房新社)など。



南三陸町を走るLove Cross Bus。車体のラッピングが被災地を明るく彩ります。車内には、世界の子どもたちから贈られた絵画やメッセージも展示

東日本大震災 被災者支援の Love Cross Bus 無料運行中！(宮城県南三陸町)

高齢者や子どもたちの 毎日をサポート

バス調のイラストに彩られた可愛いバスが宮城県南三陸町を走っています。その名は「Love Cross Bus」。心と心をつなぐバス。日本赤十字社の支援で無料運行されているコミュニティバスです。

仮設住宅を出発したバスは、峠を越えて町役場や病院、学校などをきめ細かく結び、被災者の暮らしを交通面から支えています。

仮設住宅と町中心部を結ぶ生活の足に

町中心部の75%の建物が津波で流出するなど、今回の震災で甚大な被害を受けた南三陸町。平地が少ない地形のため、被災者の多くは隣接する登米市に建てられた仮設住宅などで暮らしています。しかし旧市街地と仮設住宅とは30キロ近くも離れていて、高小生の通学や高齢者の通院・買い物などに不便を強いられました。

Love Cross Busは、こうした被災者の生活の足を確保したいという南三陸町からの要請を受けたもので、世界各国の赤十字社を通じて寄せられた「海外救済金」を財源に、毎日5便が運行されています。登米の仮設住宅に住む三浦達之輔さんは「働いていたクリーニング店が津波で被災するなど大変な思いをしました。このバスは、無料で利用できるのので助かります」と話します。



バスの愛称を考案した阿部武尊君

命名は 地元の高校生！

バスの愛称「Love Cross Bus」は「Love」と「Cross」を考えたのは、県立志津川高校2年生の阿部武尊君。学校からの下校に毎日このバスを利用してきます。



岩手県支部の「サロン」。テーブルを囲んだお茶の時間は大切な交流の場

東日本大震災8カ月

「語り、笑い、癒しと元気が生まれる場を」 「コミュニケーション」で「コミュニティ作り」を応援

東日本大震災で自宅を失った被災者の多くが生活する仮設住宅を対象に、日本赤十字社はリラクゼーションなどをまじえた「こころのケア」活動を実施しています。被災者の日々の生活の困りごとや悩みなどに耳を傾けるとともに、仮設住宅の「コミュニティづくり」を応援しようという試みです。

不安乗り越える 笑顔

岩手県では、県支部と岩手県臨床心理士会の協働により、仮設に暮らす被災者に寄り添う「サロン」を実施中。岩手県宮古市の中里仮設団地1では、避難所での活動を継続する形で、毎週土曜日に集会所を開放してのサロンを9月から開いています。看護師による健康相談や血圧測定、簡単な運動を交えたリラクゼーションなどを行う「こころのケア」活動で、誰もが

参加して笑顔になれる場を提供しています。

9月23日のサロンには仮設住宅に暮らす女性たち19人が集まりました。話題はやはり、慣れない仮設住宅での生活について。「台風15号の時には、2重サッシの合間に水が入ってきた」「湿気がひどい」「雪が降ったら、軒から水が垂れてきて洗濯物が干せなくなりそう」など、心配は尽きません。それでも「こうしていられるだけでも、ありがたいこと」と参加者からは笑顔がこぼれます。

住民同士が集う きっかけに

宮城県では石巻市・女川町の避難所での「こころのケア」活動が6月18日から始められ、活動が広がりました。県支部と特殊赤十字奉仕団・地域赤十字奉仕団、さらに宮城県臨床心理士会の協働の取り組みです。10月からは活動場所を仮設住宅へ移行し「コミュニティ作り」を支援しています。

被災者がそれぞれの住宅に移り、一人ひとりの生活の様子や健康状態が外から見えない今だからこそ、「こころのケア」活動が求められています。宮城県臨床心理士会の内藤寿子さんは「こうした機会が、家に閉じこもりがちの方が外に出るきっかけになります。住民の皆さんの自発的なつながりを促していければいいですね」と活動に期待を寄せています。



宮城県麗人会赤十字奉仕団によるリラクゼーション。笑顔も疲れをほぐします

仮設住宅では、近所付き合いのきつかけをつかめない被災者は少なくありません。とりわけ一人暮らしの高齢者や障がい者は孤立しがちです。「こころのケア」活動に協力する宮城県臨床心理士会の内藤寿子さんは「こうした機会が、家に閉じこもりがちの方が外に出るきっかけになります。住民の皆さんの自発的なつながりを促していければいいですね」と活動に期待を寄せています。

クウェート政府が 400億円相当の原油寄贈

日赤通じ被災者の生活再建へ活用

東日本震災の被災地復興支援を目的に、クウェート政府から500万バレル、約400億円相当の原油が日本政府に寄贈され、その代金相当額が日本赤十字社に寄付されることになりました。500万バレルは約80万キロリットル。日本の石油消費量の1・5日分に相当します。10月12日には、横浜市の製油所で引渡式が行われました。

日本・クウェート 親交の架け橋に

「被災者のために効果的な事業を実施してほしい」というクウェート政府の思いが込められた寄付金は、両国間協力の架け橋となる。日赤を通じて、被害が大きかった岩手、宮城、

福島、茨城の3県へ被災規模を総合的に勘案して配分され、県の支援事業に充てられます。

原油の一部を積んだ第一陣のタンカーが横付けされた製油所で行われた贈呈式典では、クウェート石油公社のアル・ザンキ最高経営者(CEO)が、「地震や津波災害に対する日本の対応は、我々にと

って学ぶべき模範となりました。日本への石油供給確保に尽力していきたい」と被災地および日本を激励しました。



レセプションで挨拶をする近衛社長

同日夜に開催されたレセプション会場では、寄付金による支援事業者を代表して日赤の近衛忠輝社長が挨拶。被災者の生活再建に尽力していくことを改めて強調するとともに、湾岸戦争の際に日赤がクウェートへ派遣した医療班が

仮設住宅入居者への家電セッ ト寄贈など幅広い支援事業を展開してきました。

とりわけ高齢者や子どもたちなどを視野に入れ、高齢者福祉施設への介護ベッドなどの寄贈、被災した学校の保健室への備品整備、医療インフラの再建事業、被災者のこころのケアなどに力を入れています。

1カ国からのものとしては最高額となった今回の寄付金は、県が行う事業を後押しする、新たな支援の形となるものです。

幅広い分野の 支援策拡充へ

日赤は、これまでも海外の赤十字・赤新月社から寄せられた海外救援金を財源に、

地域基盤復旧へ向けた取り組みのほか、医療や教育、福祉・介護などへの支援、農林水産業の復興や雇用創出事業、さらには原発事故被災者対策など多岐にわたる分野で県が実施していく被災者支援に充てられる予定です。

先駆者たち ~The History~

Vol 3

橋本綱常

赤十字病院初代院長として女性救護員を養成

女性が社会に出て働くことがごく例外的だった明治の中頃。救護員(看護師)への女性活用を唱えた一人が、日本赤十字社病院の初代院長を務めた橋本綱常です。

陸軍軍医監だった綱常は明治17(1884)年、赤十字国際会議(ジュネーブ)に参加しました。この会議での女性救護員活用の決議もあって帰国後に救護員養成機関としての病院設立を訴えたのです。

日赤の前身である博愛社設立のきっかけとなった明治10年の西南戦争ですが、その際の救護活動は男性のみに与えられた任務でした。綱常の働きかけもあり、明治19年に博愛社病院(現・日赤医療センター)が設立。明治23年から看護婦養成の教育が始められました。

幕末志士 橋本左内を兄に

橋本綱常は福井藩の外科医橋本長綱の四男として弘化2(1845)年に生まれます。13歳で藩校明道館医学所に通い医学の勉強を始めますが、15歳の秋に事件が起こります。兄である橋本左内が「安政の大獄」()に連座し、斬首の刑に処せられたのです。



橋本綱常書幅「安心これ業、更に方無し」(個人所蔵)

福井市立郷土歴史博物館の学芸員・角鹿尚計さんは「父親を早くに亡くした綱常にとって左内は父親代わり。大変に可愛がられていました。後年、厳格な医師として周囲から怖がられた綱常でしたが、兄・左内の話におよぶと声を出して泣いたとも伝えられています」と2人の関係を語ります。



左内の没後、苦勞を重ねながらも長崎や東京で西洋医学を学んだ綱常は、旧幕府軍と新政府軍との戦である戊辰戦争に医師として従軍します。明治3年に兵部省軍事病院の医官となり、同5年から5年間ドイツへ留学。帰国後は東京帝国大学医学部教授、陸軍軍医総監などを歴任しました。

近代消毒法を導入

陸軍軍医のトップとなり、赤十字病院の院長も務めた綱常は、近代医学の発展にも大きな役割を果たしています。その一つが消毒法の確立。角鹿さ



綱常の生家跡。兄・左内の生家として地元の人に現在も親しまれている。

んは「外科手術の際の近代的な消毒法を導入。その確立に力を注ぎました」とその功績を評価。「うがいや手洗いの励行などを通じ、日常生活での衛生面面向上にも尽力しました」と指摘します。

こうした姿勢は、赤十字病院の運営にも反映されていたようです。明治42年2月、綱常は65歳で永眠しますが、明治から昭和にかけて活躍したジャーナリスト徳富蘇峰は「廊下、病室、庭園に至るまで、一つのちりも見えないのは驚嘆すべし。橋本綱常の品性の反映と申すべし」と追悼記事の中に記しています。

将軍の継嗣問題などをめぐり、時の大老、井伊直弼が幕政に批判的な志士を弾圧した「安政の大獄」。左内のほか長州藩の吉田松陰も死罪となった。

理事会審議報告

平成23年9月16日、理事会に文書による付議が行われました。審議結果は左記のとおりです。

付議事項

- 1 予算の補正について
(山田赤十字病院のエネルギーセンター建物等の所有権移転にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)
- 2 不動産の処分について
(沖縄赤十字病院の新築移転に伴う不動産の処分)

今回の審議は、予算の補正及び不動産の処分の時期の関係から文書をもって理事会に諮られました。理事の構成役員(社長、副社長及び理事)現員62人のうち、57人から回答が寄せられ、その過半数を超える56人が賛成しましたので、平成23年10月7日付で原案のとおり議決されました。

常任理事会開催報告

平成23年10月20日、本社において平成23年度第6回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

記

付議事項

- 1 資金の借入について
(岡山赤十字病院の電子カルテシステム導入にかかる資金の借入)
- 2 理事会及び常任理事会に付議する予算の補正、資金の借入及び不動産の処分の手続きについて

審議の結果、資金の借入については原案のとおり議決され、理事会及び常任理事会に付議する予算の補正、資金の借入及び不動産の処分の手続きのうち、常任理事会に関する部分は原案のとおり議決され、理事会に関する部分は本年11月14日に開催の理事会に付議することにいたしました。

また、赤十字救急法等普及事業に関する企業・団体とのタイアップ事業及びクウェート国からの原油無償提供による東日本大震災復興支援事業について報告しました。

INTERVIEW 1

雨の日でも元気いっぱい大あばれ!
「スマイル体育館」大槌町に完成



子どもたちの運動不足解消へ
岩手県大槌町立大槌北小学校 佐野容子校長



吉里吉里小学校にお世話になっていた1学期は、体育館を仕切って教室にしていたから、校庭が使えない雨の日は体育ができませんでした。また震災後は、離れた学校に通うため通学もバスになり、子どもたちが体を動かす機会が減ってしまったと感じています。そうした中で、日赤から「スマイル体育館」という思いもよらないプレゼントをいただきました。仮設建設にあたって当初は「体育館までは無理」と聞いていたので、本当に感謝しています。体育館の建設資金は、世界の皆さんの寄付が各国赤十字社を通じて寄せられたものと聞いています。この世界からの支援を、子どもたちの運動不足解消と、体力向上に役立てていきたいと思っています。

笑顔で楽しいこといっぱいしたい 斎藤愛ちゃん(大槌小学校3年)

ほかの学校と違って体育とかをするので、友達もいっぱいできると思います。前の大槌小学校の体育館よりも狭いけど、ドッチボールとかいろんな体育の授業ができるとうれしいです。みんなで楽しいことをすると、きっと笑顔であふれると思います。



岩手県大槌町に建設された応急仮設校舎には、5つの小中学校が入っています。海外赤十字社から寄せられた「海外救援金」をもとに、体育館の建設費用を出資。児童・生徒の公募で、体育館は「スマイル体育館」と名付けられました。

宮城県石巻市立渡波小学校1年生児童のみなさん



日本赤十字社の被災地支援

私たちの「ありがとう」を勇気と力に
ただいま継続中

「みなさんの支えがあったから頑張れた」—全国から医療看護班を派遣し、震災直後から支援活動を継続している日本赤十字社。その取り組みに被災地から感謝の声が寄せられています。

10月末までに東北3県の避難所がすべて閉鎖されるなど、被災地は震災後の区切りを迎えつつあります。しかし、復興への道のりはまだ遠く、被災者の生活再建はこれからが正念場。日赤も、高齢者や子どもたちなどを視野に入れた支援事業を継続中です。「ありがとう」の声を、私たちの勇気と力に変えて、被災地のいまとこれからを応援していきます。

INTERVIEW 2

まだまだ温かい支援が必要です



避難したダイニングセットは思いの場所に

株式会社長寿会 グループホームあゆかわの郷 代表取締役 小笠原均さん



認知症高齢者の方が入居する私たちのグループホームですが、震災後の避難生活は過酷でした。津波からは18人全員の入居者が無事避難できましたが、転々とする避難生活で3人が亡くなり、1人が今も入院中。生活環境の急激な変化によるストレスが影響したと考えています。

「入居者が安心して生活するための仮設ホーム」として行政を上げ、9月末にここが完成しました。しかし、県としても予算に限りがあり電化製品などの備品までは厳しかった。我々も津波ですべてが流された。文字通り一貫の状態でしたから、正直どうしようかと。そんな時、日赤さんから電化製品や介護用ベッド、ダイニングセットなどをご提供いただけることになり、大変ありがたかったです。

たくさんボランティアスタッフの方にも協力をいただいてきました。全国のみなさんの支援に深く感謝しています。こうしたさまざまな支えがあったから、私たちは頑張れたと思います。でも、まだ終わったわけではありません。復興はこれからが本番。まだまだ温かい支援が必要です。もちろん私たちも、元の生活に一日も早く戻るよう、闘わなければいけないと決意しています。

「海外救援金」を財源に、岩手・宮城・福島県内で建設された66カ所の仮設高齢者施設へ介護ベッドや電化製品などの備品計2020点を寄贈しました。(10月初旬現在)

INTERVIEW 3

ありがたい被災者同士のふれあいの場



「赤十字の心と体のほつとケア」で実施したリラクゼーション。こうした場も住民のコミュニケーションのきっかけに

宮城県山王市営住宅跡地仮設住宅入居者 佐藤勲一さん

多賀城市内で被災して、住んでいた借家を津波で失いました。避難所生活を経て、この仮設住宅には5月に入居しましたが、家電セットはありがたかったです。全部そろっていましたから、助かりました。

元々中華の料理人をしていましたから、一人暮らしですが食事に困ったりはしていません。でも、先のことを考えるとね…。身体の方は健康ですけど、何かあったときどうすればいいのか。そんなことを考えると不安になりますよ。仮設に入居している隣近所の方とはあいさつくらいはします。でも、実はお互いに名前を知らない人も多くいます。世間話をするとなんてほとんどありませんから。

こうした毎日ですから、赤十字の皆さんやボランティア団体の方々の炊き出しなどの活動は本当にありがたいです。住民と一緒に外に出て、顔を合わせる機会になりますからね。

被災各県の日赤支部では、被災者の「こころのケア」や仮設住宅でのコミュニティづくりの支援を行っています。

INTERVIEW 4

世界からの支援に勇気もらった



行政パートナーとして地域の復興に全力を注ぐお二人

宮城県女川町役場 阿部直子さん/木村直人さん

仮設住宅での生活には皆さん大分慣れてきたのでは感じています。問題も見えるようになってきました。一番の課題はコミュニティーづくりです。いろんな地域にお住まいになられた方が集まっていますので、お互いに知らない方も多く。そうした条件の下でも、助け合って暮らしていける地域を作っていくためには、そのために町としても可能な限りのバックアップをしていきたいと思います。

多くの被災者は津波ですべてを失い、マイナスから出発。ですから、仮設入居時に一通りの家電が用意されていて、すぐに生活がスタートできたことに、皆さん感謝しています。町としても、正直ここまで支援していただけたとは思っていませんでした。

個人と一つの団体には難しいことで、世界に広がっている赤十字ならではの支援だと実感しています。(家電セットのほかにも) 今回の震災では、各国の皆さんから支援の声が寄せられ、支援物資や義援金も町に送られてきました。世界の多くの皆さんから助けられていることを感じ、そして勇気づけられています。

INTERVIEW 6

子どもたちの健康維持に役立てたい



借り物ではない自分たちの教室。勉強もはかどります!

宮城県石巻市立渡波小学校 養護教諭 狩野陽子先生



渡波小は津波で校舎の1階が水没。保健室の備品もすべてだめになりました。他の学校の教室に間借りしていた1学期は、身体測定の際もその都度器具を借りなければならず、日程調整などに苦労したこともありました。8月末に仮設校舎が完成しましたが、保健室のベッドや体重計などの備品を日赤からの支援でそろえることができ、本当に助かっています。子どもたちの健康維持に役立てていきたいですね。1学期の間、子どもたちはバスで30~40分をかけて通学していました。初めての体験でしたから「気持ち悪い」などと体調を崩す子どもが多かったように思います。避難所での生活に「周りがうるさい」「よく眠れない」などと訴える子どももいました。

仮設校舎が完成し、通学時間が短くなりました。全学年が同じ校舎で生活できるようになったことで、以前に比べると子どもたちが元気になるように見えます。一方、これまでどの家庭も毎日の生活に精一杯。先を考える余裕がありませんでした。でも、今後のことを考えなければならぬこれからは、親も子どもも不安と向き合う事になるかもしれません。そうした意味で、子どもたちへの「こころのケア」が課題になるのではとも感じています。

「海外救援金」を財源とする教育支援事業を実施。岩手・宮城県内の被災小中学校と高等学校の計99校を対象に、保健室の備品や消耗品を寄贈しました。

INTERVIEW 5

支えられて頑張れた



避難所となった渡波小学校に日赤が設置した簡易水道は、被災者の健康保持に役立てられました

宮城県石巻市臨時職員 山田葉子さん



体育館や教室に一時は2000人もの被災者が生活していたこの渡波小学校避難所ですが、インフルエンザなどに集団感染することもなく、無事過ごせました。自分たちでうがいや手洗いを励行したり、日赤の医療看護班に入っていたことで健康が管理できたからだと思います。

仮設入居の際に、日赤から家電セットが贈られるということは皆さん報道で承知していて、安堵している被災者が多かったですね。すべてが流されてしまい、何もない状態でしたから、仮設入居の日から一通りの電化製品がそろってすごく助かりました。欲を言えば、カーペット敷の仮設ではほろほろの掃除が難しいので、掃除機もあれば良かったかな…。

これらの生活について言えば、高齢者の方や自営の方は本当に大変です。石巻の復興と私たちの生活再建が本当にできるのか。不安はぬぐえませんが、自分ができる範囲で頑張りたいと思っています。

地震直後に渡波小学校に避難してきた山田さんは、仮設住宅入居までの2か月半、渡波小学校の体育館で避難生活。4月半ばに市の臨時職員に応募・採用され、10月末までの契約で避難所の運営や管理に携わってきました。

※これらの支援事業は、海外赤十字社から寄せられた「海外救援金」が主な財源です。皆さまから寄せいただいた義援金は、全額が、義援金配分委員会を通じて被災された方々のお手元に届けられます。

献血で被災地を応援 協力者に東北3県の名産品プレゼント



3県の名産品を手にとって笑顔の献血者



広島 2011.9

広島県赤十字血液センターは9月を「東北3県応援キャンペーン」と位置づけ、献血に協力していただいた方に岩手・宮城・福島県の名産品をプレゼントしました。各献血会場では献血していただいた方から被災地に向けた応援メッセージを募集。期間中に寄せられた484のメッセージは3県の血液センターに届けられました。また、献血ルームには大震災での日本赤十字社の活動の模様を説明する写真パネルも展示されました。

献血者の皆さんからは「少しでも被災地の助けになれば」「献血することに迷っていましたが、キャンペーンを知って来ました」との声が寄せられました。

東日本大震災 ぶさかわ犬「わさお」 義援金を首に下げて支部訪問



義援金の目録を首に下げて
誇らしげな「わさお」



青森 2011.9.6

「ぶさかわ犬」として有名な秋田犬「わさお」が9月6日、青森県支部を訪れて東日本大震災の義援金77万8206円を寄付しました。義援金は自身が主演した映画「わさお」のチャリティー上映会や、故郷の鱒ヶ沢町観光協会などに寄せられたものです。

目録を首に下げたわさおと一緒に支部を訪問した飼い主の菊谷節子さんは「わさおも頑張っているの、東北の皆さんも頑張してほしい」。受け取った県支部の奥川事務局長は「いただいた義援金は皆さんのやさしいお気持ちと一緒に、被災した方々にお届けします」と応えました。

寄付金付き自販機 ライバル8社の 清涼飲料会社が協力



沖縄県支部長の仲井眞弘多知事(中央)を
囲んで、各社の代表が協力を約束



沖縄 2011.10.11

沖縄県内の主な清涼飲料販売会社6社と日赤沖縄県支部が10月11日、「赤十字寄付金付き自動販売機」設置協定に調印しました。競合関係にある各社が共同したこの社会貢献活動について企業の担当者は「『苦しんでいる人を救いたい』という日赤の思いに応えたかった」と語っています。他に2社が参加することになっており、自販機設置率が人口比日本一の沖縄で寄付金付き自販機が県内のいたるところで活躍することになりそうです。

調印したのは沖縄コカ・コーラボトリング、沖縄ペプシビバレッジ、ダイードリンコ、沖縄サンポッカ、琉仁カスタマーサービス、沖縄コーシーコーヒー。2011年度に108台、2012年度以降は200台の設置が目標とされており、自販機を通じた寄付金額は年間430万円余りになると期待されています。今後予定されている沖縄伊藤園と沖縄パヤリースの参加によって、設置台数と予想寄付金額はさらに増える見込みです。

県庁内での調印式では、各社を代表して沖縄コカ・コーラボトリングの高橋俊夫社長が「6社が共同して活動を推進し、微力ながら社会の役に立てれば」とあいさつ。日赤沖縄県支部長の仲井眞弘多知事は「今回の大震災で日赤はさまざまな貢献をさせていただきました。これからの赤十字活動は企業などの支援がなければ機能しません。今後もぜひご支援をお願いします」と訴えました。



山形県の郷土料理「芋煮」を提供する奉仕団員ら

郷土料理で「敬老の日」のお祝い 徳島・山形県支部が合同で炊き出し



徳島 山形 2011.9.18~19

「こんなうめえ牛丼、久しぶりに食べたさ〜」「芋煮は具たくさんで本当にうまかったあ〜」

徳島・山形両県支部は9月18、19の両日、宮城県の女川町総合体育館避難所で合同炊き出しを行いました。両支部による炊き出しは5月の気仙沼市に続いて2回目。食事を通して、被災者に少しでも元気になってもらいたいと企画されたものです。地域赤十字奉仕団の団員や防災ボランティアなど26人が参加し、避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされている被災者延べ500人に、両県の郷土料理である芋煮やだし付き冷奴、阿波牛たっぷりの牛丼、そば米汁、さらに両県産のフルーツなどを振る舞いました。

「敬老の日」の19日には、メンバーの笑顔とともに、お赤飯を提供。「こんな形で敬老の日を祝ってもらえるとは思ってもみませんでした。お赤飯を食べるのは、被災して初めて。本当においしい」と目を細めながら、ほお張る方もいました。

参加した団員は「これからも自分たちにできる形で、被災者支援をしていきたい」と頼もしく語ってくれました。

上手に手当ができる ようになったよ！ JRCメンバー 救急法コンテスト



緊張しながらも慣れた手つきで手当
する参加者



千葉 2011.10.1

青少年赤十字(JRC)で活動する小中高生らによる「赤十字救急法コンテスト」が10月1日、千葉県赤十字会館で開かれ、三角巾を使った手当や副子による固定など日ごろの練習成果を競いました。各チームが「頭頂部切り傷、腕の切り傷の手当」(小学校3~6年の部)など、学年別に設定された課題に挑み、手当の正確さや早さなどによって順位がつけられました。

東庄町立東城小学校6年の布施悠希君は「最初は教えてもらいながら覚えましたが、練習するにつれて、正確に手当ができるようになって、よかったです」と感想を語りました。

AEDの講習・体験で AKB48カードをGET!



左から野村さん、藤田さん、今回がAED
初体験の渡辺まなみさん(1年)



福井 2011.10.17

今冬からAED(自動体外式除細動器)の使い方を体験イベントや講習会などで学んだ参加者へ、AKB48の写真とメッセージが入った特製受講証をプレゼントするキャンペーンが始まります。

福井市にある啓新高等学校(荻原昭人校長)のJRC部では10月17日、プレ企画としてAED体験講習を実施しました。野村知加さん(2年)は「JRCのトレセンでもAEDは勉強したので、いざというときにも大丈夫」と頼もしい感想。藤田佳奈さん(同)は「男子にはAKB48ファンが多いから、講習会に誘ったら参加してくれるかも」と笑顔を見せてくれました。

書籍紹介

『医師・看護師の有事行動マニュアル 第2版』
井上 忠男 著

日本赤十字秋田短期大学教授の著者が執筆した武力攻撃事態における救護医療関係者の行動マニュアルです。国民保護活動にあたる救護医療関係者が知っておきたい武力紛争時の法の適用関係、医療関係者の定義・役割や権利・義務、武力紛争時における赤十字標章の適正使用と管理などについて、国際人道法や国内法を参照しながら解説されています。2007年に刊行したものの全面改訂版です。



四六判152頁 / 1260円(税込) 東信堂

特別企画 2012年版 赤十字カレンダー

今年のカレンダーは、世界各国の美しい風景とその下に住む人々の生命、健康と尊厳を守るために活動する赤十字をテーマに作成しました。

赤十字手帳(300円)も好評販売中!

ご購入方法

下記記載事項をすべてご記入のうえ、以下の通りお申込みください。

▶記載事項

- お名前(ふりがな)・お電話番号
- 商品名・数量・ご請求書の宛名
- ご送付先住所(郵便番号含む)

▶申込先

F A X 03-3459-1432
メール info@nisseki-service.com
ホームページ www.nisseki-service.com
ハガキ 〒105-0012
東京都港区芝大門1-1-3
(株)日赤サービス

※日赤本社ビル西館1階日赤サービス売店でもご購入いただけます。
平日:9時~17時
電話:03-3437-7516

1部 700円(税込・送料別)



※送料:最大567円(ご注文金額が2万円以上の場合は無料)

Voice&プレゼント

また学生たちの活動を

石山慶多(新潟県新潟市)

この新聞で赤十字社の活動がよくわかるようになりました。被災地でも明るく強く活動する学生、ボランティアの方々が本当にすばらしいと思います。また読んでみたいと思いました。

分かりやすかったAEDの使い方 大塚博美 埼玉県川口市)

(10月号に掲載された)AEDの使い方はわかりやすい特集でした。現物の近くに掲示してあるとよいと思いました。

プレゼント応募方法

上記で紹介した赤十字カレンダーと、赤十字手帳をセットにして5名様にプレゼントします。

以下の項目を明記の上、ハガキ・FAX・メールにてご応募ください。

お名前(匿名ご希望の場合はその旨もご記入ください)

郵便番号・ご住所

電話番号

年齢

赤十字新聞11月号を手にされた場所(例/献血ルーム)

赤十字新聞へのご意見・ご感想や、

扱ってほしいテーマなど

応募先

・ハガキ/〒105-8521

東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社 企画広報室

赤十字新聞11月号プレゼント係

・FAX/03-3432-5507

・メール/koho@jrc.or.jp

(件名「赤十字新聞11月号プレゼント係」)

応募締切/11月28日(月)必着

当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



㈱日赤サービス提供

名誉総裁皇后陛下
日本手拭い600本を
御下賜



川満園長(中央)から手拭いを受け取って、満面笑顔の儀保さん(左、104歳)と高良松さん(100歳)

全国 2011.10.12

日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下から10月12日、日本手拭い600本が日本赤十字社へ御下賜されました。10月20日の皇后陛下お誕生日を記念して毎年行われています。今年、高山赤十字介護老人保健施設(はなさと 岐阜県)、特別養護老人ホームの小川ひなた荘(埼玉県)・豊寿園(福岡県)・やすらぎの郷(福岡県)・那覇市安謝福祉複合施設(沖縄県)、長崎原爆病院(長崎県)・長崎原爆諫早病院(同)に配られました。那覇市安謝福祉複合施設に入所している儀保ツクノさんは「手拭いのお見舞いをいただき、とてもうれしいです。これを励みにますます長生きします」と、感謝と喜びを語りました。

災害に備える
新型テント



他の防災機関が保有する同型テントと連結して、災害時にベースキャンプを構築するなどの可能性が広がります

青森 2011.8.27

8月27日に十和田市で開催された青森県総合防災訓練で、青森県支部は新たに装備した急速展開型テントを公開し、参加者の注目を集めました。従来のエアテントは冬場の結露がひどく、また気温が下がると空気を充填しなければならぬなどの課題があります。

さまざまなテントを検討した結果、米軍の規格テストをクリアし、自衛隊や消防などでも配備が進んでいるこのテントを導入することに。断熱性や遮光性に優れていることに加え、複数のテントを連結して救護スペースを拡大することも可能です。赤十字では災害に備え、今後も即応体制の強化を図ります。

アートコレクション展
から義援金を寄付



東京 2011.10.14

全額が配分委員会を通じて被災者に届けられます

「第17回 秘蔵の名品アートコレクション展」の純益金562万2289円が10月14日、企業文化交流委員会の清原當博委員長(株式会社ホテルオークラ東京代表取締役社長)から、東日本大震災義援金として日赤に寄せられました。

同展は社会貢献に造詣が深い企業・団体でつくる企業文化交流委員会が中心となり、毎年夏にホテルオークラ東京で開催。今年は8月6日~28日、「文化勲章受章作家の競演 日本絵画の巨匠たち」と題して、全作家の作品計90点を展示しました。同ホテルが復興支援として開催したイベントで集まった710万5007円も同日寄付されました。例年は日赤活動資金としての寄付ですが、今年は義援金として協力いただきました。

東日本大震災
君津市奉仕団が避難者を
日帰りバス旅行に招待



千葉 2011.9.21

福島県からの避難者の願いは、一日も早く原発事故が収束し、元の生活に戻ることで

君津市赤十字奉仕団は9月21日、東日本大震災を受けて市内に避難している方々を、成田山新勝寺や成田国際空港などへの日帰りバス旅行に招待しました。あいにくの天候でしたが、避難者を含む90人が参加。一行は成田市長や成田市広報キャラクター「うなりくん」の出迎えを受けたあと、新勝寺本堂で行われた東日本大震災復興祈願の御護摩祈禱に参加して、故郷の一日も早い復興を祈りました。同奉仕団の鎌田和子委員長は「避難されている方々を誘って、4月から食事会を合計10回開いてきました。今日一日、笑顔で楽しんでもらえれば」と語っていました。



中国大地震から3年半 復興遂げる被災地

日本からの支援に、 たくさんの「ありがとう 謝辞」

写真：渋谷敦志



2008年5月12日に発災した中国大地震。死者・行方不明者8万7000人に及ぶ大災害から、3年半が経つ。

日本赤十字社は被災した学校や病院の再建を中心に、住宅支援、生計支援、職業訓練などハードとソフトの両面にわたる事業を実施。特に政府の支援が届きにくい地域での活動に力を入れてきた。

四川省徳陽市にある農村レストラン。昼時、店内は大勢の客であふれ、厨房では大きな中華鍋を使って絶え間なく料理が作られていく。

オーナーの朱永蓉さんは、日赤が2010年3月から始めた生計支援事業のなかで、職業研修を受けた一人だ。2カ月にわたる研修でレストラン経営を学び、大繁盛のこの店を切り盛りするまでになった。

夫と2歳の息子とともに幸せそうな笑顔を見せる朱さんだが、大地震で当時7歳の一人息子を亡くし、「生きる希望もなく、毎日涙を流していた」と言う。今は毎日忙しく働きながら、「日本からの支援のおかげで、もう一度人生をやり直そうという気持ちになりました」と語る。

綿陽市の育紅小学校では、日赤の支援を受けて2010年9月に完成した校舎で、500人余りの子どもたちが学んでいる。東日本大震災はこの子どもたちに、大きな悲報として伝わった。

「自分たちを支援してくれた日本に何ができるのか」と考えた生徒たちは、全校で募金を開始。6年生の王琴さんは「被災した人は水も食糧もなく困っていると聞きました。だから、少しでも、お小遣いや朝ご飯を買うお金を募金しました」。

中国大地震の支援では、日赤に寄せられた51億7500万円により赤十字の復興支援事業が進められた。今、急速に復興が進む被災地では多くの人々が笑顔を取り戻すと同時に、たくさんの「謝辞(ありがとう)」の気持ちを日本に送っている。



▲屈託のない子どもたちの笑顔こそ、復興への希望です



▲日本の被災地のために、小遣いを募金した王琴さん



▶経営するレストランの前でご主人と。震災を乗り越え、朱永蓉さんにも笑顔が戻りました

▲昼時、厨房は目が回る忙しさ。待ちきれない客が料理を取りにくることも

特別番組「中国大地震から3年半」(仮題)

BS朝日 11月23日(水・祝)午後2時~2時半

中国大地震の被災地から東日本大震災の被災者に向けて、多くの応援メッセージや寄付が寄せられました。番組では復興が進む中国の被災地の今と、人々の日本へ寄せる思いを伝えます。

紛争下の医療を武力攻撃から守れ

ICRCがキャンペーン

医療施設とそのスタッフ、患者らをターゲットとする攻撃や暴力が世界の紛争地で後を絶ちません。赤十字国際委員会(ICRC)は、この重大な人道危機に対し、紛争下での医療を守るためのキャンペーンを今年8月からスタートさせました。

地域一帯の保健医療にダメージ

2009年1月、内戦が続いていたスリランカ北部で唯一機能していた病院が攻撃され、患者に多数の死傷者が発生。病院は移転を余儀なくされました。同年12月、ソマリアの首都モガディシオの大学では医学生の卒業式が行われていました。ソマリア国民にとっては待望の医師が誕生する瞬間でしたが、式典は自爆テロに襲われ、若い医学生のいのちは失われてしまいました。

これらの事例は氷山の一角に過ぎません。医療に係る人や施設への攻撃は、

紛争地域で常態化しつつあります。国家間の争いから武力勢力同士の争いへと紛争形態が変化し、戦場も市民の生活と隣り合わせの市街地となったことなどが背景です。

その結果が招いている事態は深刻です。医療スタッフが土地を離れたり、医療施設が閉鎖されることで、地域一帯の保健医療サービスの機能が低下。本来助かるはずのいのちが救えなくなってしまうからです。

「戦争にもルールがある」 国際人道法の周知を

ICRCによる調査では、こうした攻撃

や暴力は、紛争下にある16カ国で655件(2008年夏~2010年末)。キャンペーンはこの調査に基づくもので、医療施設やそのスタッフ自身による安全確保の取り組みを支援、紛争地域の政府や軍隊、武装勢力などに対して、これらの攻撃が国際人道法に違反することを周知し、紛争下の行動規範、ルール作りを進めていく、紛争下でない各国政府にも働きかけ、紛争国政府との対話や世論の喚起を促していく、などが主な取り組みです。

キャンペーンは2015年までの4年間継続し、事態の改善を目指します。ICRCの担当者は「エイズ撲滅のために世界中の世論が動いたのと同じくらい、多くの人々のいのちと健康にかかわる大きな問題です」とその重要性を語っています。今年11月末開催の赤十字国際会議の主要テーマの一つとしても議論される予定です。

重大な関心を持って 日赤も協働

全国に92の赤十字病院を抱える日本赤十字社は、多くの医療スタッフを持つ世界有数の赤十字として、これまでに多

数の医師・看護師を海外の紛争地域に派遣してきました。現在も3人の看護師が、スーダンやパキスタンといった国々でICRCの人道活動に携わっています。

これらの要員の安全を守っていく上でも、今回のキャンペーンに日赤は重大な関心を持ち、ICRCとともに世論喚起に取り組んでいきます。



ICRCが制作したポスター。「私は銃撃されて死んだのではない。救急車が不必要に長く検問を受けたため死んだのだ」と書かれている